

また西湖へ行きましょう

大木 康

鈴木陽一先生が、神奈川大学のご退職を迎えられたという。鈴木先生にはじめてお目にかかるから、今年 2021 年で 35 年になる。この間、中国古典小説研究の先達として、研究の上で、またさまざまな活動の上で、多くのご恩を受けてきた。鈴木先生は、わたしにとって「アニキ」のような存在である。なれなれしいようで恐縮であるが、この拙文では、鈴木さんと呼ばせていただくことにしよう。以下、起承転結に従って、この 35 年間のいささか個人的な思い出を綴ってみたい。

起

鈴木さんにはじめてお目にかかったのは、1986 年「中国古典小説研究会」（当時はまだ会とはいっていなかったが）の野辺山合宿のことであったと記憶している。これもほかならぬ鈴木さんの肝いりで刊行された『アジア遊学 218 中国古典小説研究の未来 21 世紀への回顧と展望』（勉誠出版 2018 年）に寄稿させていただいた拙文「中国古典小説研究の三十年」の中でも触れたことであるが、今西凱夫先生、西岡晴彦先生、大塚秀高先生とわたしとで、全国の中国古典小説の研究者を集めて研究会合宿をやろうということになり、各地の先生方に声をかけたのが、はじまりである。なぜ長野県の野辺山だったのかといえば、当時西岡先生が信州大学に

おつとめで、信州大学農学部附属野辺山実習施設を借りることができたからである。実習施設であって、宿屋ではないので、食事は自炊であった。みんなで材料の買い出しに出かけ、厨房で料理した。「アンタ何にもできないのね」と日下翠先生から叱られたものだが、その日下先生が早く鬼籍に入られたのはショックだった。

この合宿には、一つのコンセプトがあった（とわたしは思っている）。それは、偉い先生には声をかけないこと。もちろん参加された先生方が偉くないわけではないのだが、つまりは若手を中心に、遠慮なしにワイワイやろう、発表も、完成された研究成果の発表でなくてもよい、構想や思いつきを気ままに話せる場でありたい、ということなのであった。合宿のことを耳にされた、わたしのかつての指導教官であった伊藤漱平先生から「わたしは参加できないみたいですね」といわれ、返答に窮した。その後さまざまな糺余曲折があって、この合宿は、現在の古典小説研究会に至るのであるが、わたしなどが、どちらかといえば会の組織化に消極的であったのは、この初期合宿の精神が失なわれることを危惧したからでもある。

話を野辺山合宿に戻すと、この合宿を通して、全国の小説研究者のみなさんと知り合いになれたのは、自分にとって、その後の大きな財産になったことはまちがいない。この前後から中国に留学することが当たり前になり、日本全国の大学院生同士が留学先で知り合う機会も生まれてはいるのだが、1986年当時、同じ対象を研究していたとしても、他大学の大学院生と知り合いになる機会はほとんどなかったといってよい。その意味でも、この小説合宿は貴重な機会だったのである、おそらくこの合宿がなかったとしたら、出身大学のちがう鈴木さんと出会うこともなかったか、もしくはもっと遅れていたかもしれない。そして、何よりよかったのは、出会った時に、みんな若かったことであろう。先生というより、気の置けない「アニキ」「アネキ」や同輩としての付き合いが、その後にわたって続いた

わけである。小学校の同窓会に出ると、いいおじさん、おばさんが小学生に戻ってしまう。それと同じように、野辺山仲間は、いつまでたっても若者気分なのである。

この小説合宿は、国際的な学術交流の点でも大きな意味があったと思う。ちょうどこの頃から、中国の研究者が日本に滞在される機会も増えてきた。そして、そうした研究者が、この小説合宿に参加された。その最初は、第2回の赤城山合宿に参加された復旦大学の黄霖先生である。この時には、黄霖先生の参加に合わせて『金瓶梅』研究のセッションが開かれ、荒木猛先生、日下翠先生と黄霖先生の三人が発表しておられる。その後も、魯德才先生（1990年第5回）、嚴明先生（1994年第9回）、Victor Mair先生（1995年第10回）などの発表もあった。黄霖先生には『我們起跑在80年代』（復旦大学出版社 2016年）の編もあり、中国の小説研究もまた1980年代に大きな転換期を迎えていたことがわかる。2016年、野辺山合宿からちょうど30年後に神奈川大学で開かれた「中国古典小説研究三十年の回顧と展望」シンポジウムに黄霖先生が来日参加され、基調講演を行われたのは、感慨ひとしおであった。

鈴木さんは、この小説合宿、小説研究会に積極的に関わられ、まずは研究の上で会をリードされてきた。『中国古典小説研究』第2号（1996年）に「中国古典小説研究会夏合宿10年の歩み」と題して、第1回野辺山合宿から10年間の合宿の記録が残っている。ここでも、鈴木さんは、第2回（赤城山）で「『小説』とは何か——『小説』研究の対象」というテーマのもと、問題提起者の一人となっているし、1989年の第4回（磐梯熱海）では「小説研究への様々なアプローチ」と題するセッションの司会をつとめられ、1990年第5回（箱根）での共通テーマ「都市と小説」では「都市における物語の生成——杭州を例として」と題して発表をしておられる。こうしたテーマからもうかがわれるよう、1986年前後、中国小

て研究者がこれだけ集まって、ワイワイ議論する機運が生まれたのは、何となく既存の小説研究に飽き足りなさを感じていて、研究対象にしろ、研究方法にしろ、新しい世界をみんなが模索していた背景があったからであろう。「何を」「いかに」研究するかについて、新たな潮流が生まれつつあった。鈴木さんは、後に「小説研究におけるパラダイムの転換」と述べられるのであるが、今から思えば、1986年というのは、まさしくそうした機運が高まっているちょうどその時だったのである。そうした中で、新しい研究領域、研究方法を積極的に取り入れられ、われわれをリードしてくれたのが、鈴木アニキなのであった。

古典小説夏合宿について、鈴木さんの忘れてならない貢献が、合宿の会場として、神奈川大学の保養所を提供してくれたことである。わたしがいまだに小説合宿にノスタルジーを感じているのは、勉強のこともさることながら、しばしばその会場になった温泉が忘れられないから、ということも白状しておかなければならない。特に好きで、忘れられないのが、神奈川大学の箱根保養所と奥羽大学の磐梯熱海研修所である（奥羽大学の研修所が使えたのは、莊司格一先生が、当時学長をしておられたことによる）。昼間は研究発表を聞いて、新しい研究の刺激を受け、疲れた頭と体を温泉で癒やす。その後、夜の部では、お酒も入ったところで、いささか遠慮がないような質問もして、議論ができる。そんな至福の時間が忘れられない。その重要な舞台が、鈴木さんの肝いりで使わせていただいた神奈川大学の箱根保養所なのである。お酒といえば、鈴木さんご自身はそんなに飲まれないのであるが、わたしのような飲んべえによくおつきあいくださったものと思う。

承

鈴木陽一さんから受けたご恩にはさまざまあるが、その一つは、鈴木さんが組織された、いくつかの大きなイベントに声をかけてもらい、勉強の機会を与えていただいたことである。

その第一は、1995年3月に関西大学・神奈川大学・浙江大学の主催で行われたシンポジウム「江南と日本 国際研討会」への参加である。わたしの東大における指導教官であり、東大を退官されてから神奈川大学に行かれた尾上兼英先生が、1988年から89年にかけて、日本学研究センターの主任として北京に赴かれた。その時の日本学研究センターに、浙江大学の王勇、王宝平両先生がおられた。そうしたご縁に、杭州大学に研究滞在された鈴木さんのご縁が重なって、杭州の浙江大学で開催されたものである。このシンポジウムは、日本側参加者23名、中国側参加者48名にのぼる大規模な会であった。会の後、王勇編『中国江南：尋繹日本文化的源流』（当代中国出版社 1996年 中国語）が刊行され、拙文「江南歌謡与日本」を発表させていただくことができた。この会では、鈴木さんといっしょに、杭州西湖の春を満喫したのである。

その第二。鈴木さんは、行政能力にも長け、神奈川大学中国語学科の創設に尽力されたのだが、その中国語学科創設の10年を記念し、また折しも尾上兼英先生のご退職を記念し、『中国通俗文芸への視座 新シノロジー・文学篇』（東方書店 1998年）が編纂された。これは、『中国民衆史への視座 新シノロジー・歴史篇』（小島晋治先生の退休を記念）、『現代中国語学への視座 新シノロジー・言語篇』（松本昭先生の退休を記念）と三部作をなすものであり、中国語学科の清新の気がみなぎった論文集である。この文学篇に、「通俗文芸と知識人——中国文学の表と裏」の拙稿

を載せさせていただいた。鈴木さんは、ここに「白話小説はどのように解読されねばならないか——小説研究におけるパラダイムの転換を踏まえて」の一文を寄せておられる。小説研究の方法にこだわられる鈴木さんの面目躍如たる論文である。鈴木さん、山口建治先生、吉川良和先生、そして尾上先生がおられた神奈川大学は、たしかに日本における中国小説研究、中国通俗文藝研究のメッカだったといえよう。この伝統がいつまでも続いてゆくことを期待したいと思う。

その第三。2016年に神奈川大学の主催、中国古典小説研究会の共催によって開催された「中国古典小説研究三十年の回顧と展望」のシンポジウムに誘ってもらい、「中国古典小説研究の三十年」と題する報告をさせていただいたこと。このシンポジウムは、中国を主とする海外から40名、日本国内から16名の参加者を得た大規模な国際シンポジウムであった。この当時、鈴木さんは神奈川大学の副学長をしておられたのだが、まさしく鈴木さんの中国における広い人脈が花開いたといえるシンポジウムであった。中国にあってはいざ知らず、中国古典小説というテーマで開催された日本国内のシンポジウムとしては空前絶後である。連日の豪華な懇親会も忘がたい。

その第四。鈴木さんの学生であった王子成さんの博士論文の審査委員に加えていただいたこと。役目柄、いじわるな質問もさせてもらったのだが、その論文「長江流域の水神小説と明末文人の政治的意識について」は、なかなか立派な論文であった。先生としての鈴木さんの細やかな指導振りが想像された。

その第五。鈴木さんは、神奈川大学非文字資料研究センターにおいて、中国の図像資料をめぐる研究グループを主宰され、わたしもそのグループに加えていただいている。このプロジェクトは現在も進行中である。

転

「承」の項では、わたしが鈴木さんにお誘いいただいたプロジェクトについて記したが、ここでは、わたしが鈴木さんに無理やりお願いした事柄について簡単に記すことしたい。困った時の鈴木さん頼みなのである。

第一。1993年6月、中国社会文化学会大会で行われたシンポジウム「周縁から見た中国世界 他者への視線・他者からの視線」において、「江南の地域文化について——明清小説史の視点から」と題してご報告をいただくことができた。この時、語学・文学については、鈴木さんのほか、京都大学の平田昌司先生に「雪晴れの風景——中国言語圏の「内」と「外」」の発表、そして同じく京都大学の金文京先生にコメントをお願いするという豪華版で、その内容は『中国 社会と文化』第9号（1994年）に収められている。

第二。わたしの所属している東大の東洋文化研究所では、自己点検の一環として、教員が55歳になった年、それまでの研究を回顧し、今後10年の展望を行う自己点検セミナーを実施しており（いまはなくなった）、たまたま2014年に、わたしの番が回ってくることになった。その場では、共通した研究テーマを持つ他大学の先生お二人にコメントーターをお願いすることになっていた。この時もまた、困った時の鈴木さん頼みで、コメントーターをお引き受けいただき、厳しく、かつやさしく、的確なコメントをいただいたのであった（もうお一方は早稲田大学の岡崎由美さん。岡崎さんも、野辺山以来のおつきあいである）。

第三。東洋文化研究所では、復旦大学の文史研究院との間で学術交流を続けており、その項目の一つに、毎年夏、復旦大学で開催される「アジアの藝術、宗教と歴史研究」サマーセミナーへの講師の派遣がある。世界中

の大学の大学院生が参加するセミナーは、なかなか刺激的であって、わたし自身参加を楽しみにしているのであるが、一方で講師をさがしてお願いするのもなかなかの苦労である。鈴木さんが、中国の各地の大学で講演をしておられることは知っていたので、お声をおかけしてみたところ、さっそくご快諾いただくことができた。かくして2018年の6月に「杭州西湖と日本的一個石碑——江戸時代日中文化交流の一件小事」と題して、中国語でのご講義をお願いすることができた。

東大の学生の博士論文の審査に加わっていただいたりもした。ほんとに困った時の鈴木さん頼みで、どれだけ助けていただいたかわからない。

結

起承転結に従って文を進めてきたが、鈴木アニキには、これからもますます元気で、われわれ後進のものを引っ張っていってもらわなければならない。だから、もちろんまだほんとうの「結」はないのである。ただ、これまでのところ、という範囲において、わたしが鈴木さんから学ばせてもらつたいくつかの点をまとめておくことにしたい。わたしが学ばせてもらった鈴木さんの研究の柱はいくつかあって、おそらく①神話、②記号論、物語論、③地域文化、都市論、④図像にまとめられそうである。

①の神話について、いつだったか鈴木さんご本人が「都立だなあ」といわれたのを記憶しているが、村松一弥先生をはじめ、君島久子氏、飯倉照平氏など、都立大学の伝統ともいえる学問を継承しておられる。これは、たしか野辺山合宿の時に抜き刷りをいただいたのだが、1985年に発表された「『西遊記』と神話・祭祀——「人參果物語」の読み方」(神奈川大学『人文研究』第93号 1985年)は、実に目からうろこの論文であった。その後、「白蛇伝」研究でも、杭州の都市論とからめながら、神話の視点も

保持されている。

②記号論、物語論。この時期、ロラン・バルトだと、ジェラール・ジユネットだと、新しい文藝理論が花盛りであった。その中国文学への応用を積極的に試みられたのも、鈴木さんなのであった。「中国小説研究のニューウェーブ」(『中国古典小説研究動態』創刊号 1987年)、「テクストの解読と解体されるテクスト」(『中国古典小説研究動態』第2号 1988年)などを通じて、わたしなどは新しい研究の方法に目を開かせてもらったものである。

③地域文化、都市論。鈴木さんは、杭州大学に研究留学され、徐朔方先生について学ぶ機会を持たれた。その杭州を中心とする地域と都市の問題も、その研究の柱の一つである。杭州、西湖を舞台とする「白蛇伝」について、再三論文を発表しておられるのも、こうした関心に基づこう。

④図像。これは鈴木さんがつとめられた神奈川大学で、21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という大型の共同研究プロジェクトが立ち上がり、その中でのお仕事であるが、清代の徐揚の「姑蘇繁華図」の絵引である『東アジア生活絵引 中国江南編』(神奈川大学21世紀COEプログラム研究成果報告書 2008年)を作られたのは、見逃すことのできぬお仕事である。図像研究は、その後もCOEプログラムの後を承けて発足した神奈川大学非文字資料研究センターでの研究プロジェクトに受け継がれている。

こうして鈴木さんがやってこられた研究の足跡をながめて見ると、これは本当に、中国文学に限らず、1980年代から今日に至る世界の文学研究の潮流そのものである。そうした研究の潮流を、みずから先頭に立って、われわれを導いてくれたのが鈴木さんなのである。大学は退職されても、研究に退休はないのであって、これからもますますわれわれに新鮮な刺激を与えてくださることを心から願っている。

この拙文を書いている 2021 年の現在、世界はまだコロナ禍のまっただ中にあって、海外に出ることができないでいる。このあいだ鈴木さんと話した時、ため息まじりで「ああ、また西湖のほとりに立ちたい」といわれたのが、心に残っている。一日も早く、またいつしょにあの西湖のほとりに立ちたいものである。